Title	若い日の高木壬太郎
Author(s)	川崎，司
Citation	聖学院大学論叢, 11(3): 219-244
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=579
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

若い日の高木壬太郎

川　崎　　司

Takagi Mizutarô's Youthful Days

Tsukasa KAWASAKI

Twenty years ago I gravitated to the pure character of Mizutarô TAKAGI (1864-1921) and began to study his career. Mizutarô was faithful in the pursuit of truth as a pastor, an editor and an educator, caring neither for praise nor blame. This essay is an interim report of his life-long search for truth.

Mizutarô was the oldest son born to an ancient and respectable family. His birthplace, Nakakawane Mura in the Haibara District of Shizuoka, was the district along the Ôi river where a well-known brand of tea was produced. He grew up in the bosom of nature.

Mizutarô's father Genzaemon TAKAGI and his uncle Matazaemon YAGI were liberal and broad-minded. They were open to new ideas, especially Yukichi FUKUZAWA's ideology. Mizutarô was affected by these ideas and showed respect for Yukichi's spirit. In January 1874 he began to attend Nagao Elementary School. He was by far the best pupil in the whole school.

In 1878 he entered Shizuoka Normal School. In that year or the following year, he met Yakichi YAMAJI, who later became the famous historian, Aizan YAMAJI. As Yakichi couldn't pay for expenses of elementary school, he left in mid-course and served as assistant master.

Mizutarô hoped to study at Keiô Gijuku as a student from Shizuoka Prefecture, but in 1880 his ambition was thwarted by financial problems.

The democratic movement was in vogue. In October 1880 Mizutarô founded a literary magazine (Gozan Ippô) with his close friend Yakichi. They advocated their democratic ideology in the magazine.

In 1881 Mizutarô graduated from Shizuoka Normal School with the highest marks, and took his post as a schoolmaster in Gotenba Mura in Shizuoka, at the same aspiring to enter the world

Key words; A Pure Character, A Man of Light and Learning in a Village, A Barrier of Destiny = Baptism

of politics.

The youthful schoolmaster, intelligent and gifted with fluent speech, was looked up to as a man of learning and enlightenment in the village. In 1883 he was brought under pressure to enter politics, so he gave up his position as schoolmaster.

The next year his mother Sonoko died of illness. It was the worst thing in his life. He became aware of "Life is as evanescent as the morning dew."

In 1885 he was promoted to the Shizuoka Prefectural office. But he missed his mother and led a lonely life. At a time when he experienced great anxiety, Yakichi and others invited him to Shizuoka Methodist Church.

A girl friend, Miss Rika ÔISHI, took care of him. In 1886 Mizutarô was happily married to Rika. He worked hard to support his family, but he hadn't yet given up the hope of entering a school of higher education.

Beginning sometime around the summer of 1886, Mizutarô began to desire Jesus Christ. Several months later he crossed the Rubicon and accepted baptism from Yoshiyasu HIRAIWA, the pastor of Shizuoka Church. After that he became a son of the light.

はしがき

鄙びた町の駅脇の小さな学習塾で，何ひとつ教えることもなく，さびしい時勢の軋みを聞きながら三十の路を歩きはじめていた。二十年前のことになる。

"…最も大なる事業ハ最も静に為さるもの也。吾人豈必ずしも人耳を聳動するの事業を為して以て快とするを要せんや。願くハ基督の徒よ瀑布となりて響かんよりも，渠となり河となりて舟楫を通ぜよ，汽笛となりて鳴り渡らんよりも，石炭となりて汽(ママ)関車を動かすの力となれ。是豈最も貴きことならずや。"（「平凡の生涯」『聖書之友雑誌』M28.5）

"…余が日本の宗教家として自ら重を置くの点は神学の点に非すして寧ろ生命に在り，余は神学者たらんよりも宗教家たらんことを欲す，将来神学上の著述を為さんとの名誉心なきニ非すと雖も，高潔なる品性家たらんは更に之にまさるの希望也，…余の名誉心は百部の書著ハさんことよりも，基督の一言を生活せんこと也，"（《郷国の夢》M29.10.11）

"…小生は夫の伊蘇普物語の風となりてヒユーヘ吹かんよりも大(ママ)陽となりて音なく響なく聊かの感化を世に与へ度存居候"（《弟愛助宛書簡》〔M29.12.22〕）

高木壬太郎（1864～1921）の清新な筆鋒は，北村透谷のいう「人生の一大秘鑰」をたずねてさ迷

う私の足もとに一筋の光を投げかけてくれた。

世の中の毀誉褒貶に動かされることなく，神霊の活火を燃やし，深遠な真理を求め続けたその「平凡の生涯」を，牧師・主筆・教育者として歩んだ学者気質と実際家気質が融け合ったその人生を辿ってみたいという思いに駆られた。

信仰も薄く，教理にも疎く，歴史観など無縁の私に，壬太郎が望んだ“神と偕に歩めりとの簡短にして而かも美麗なる伝記”（「模範的生活」『護教』M33.11.3）の書き手になることは到底できそうもないが，その実像に一歩なりと近づくために，伝記資料を集め整える仕事が残されている。道は遠い。 '98夏

○引用文中，漢字は原則として新字体に改め，仮名遣いは原文にしたがった。中点（・）は，その間の言葉や文を省いたことを示す。
○壬太郎没後，記念録の作成にあたり，高木二郎氏（壬太郎次男）が壬太郎の「備忘録」（未見）より抜き書きしたもの［東京神学大学図書館蔵］を《日記》と記した。
○“　”…壬太郎文からの引用，〈　〉…他の文献からの引用，《　》…草稿・書簡・日記・覚書など，［　］…所蔵先，ご教示いただいた方（機関）の名など，（＝　）…筆者による注
○M…明治，T…大正，S…昭和，H…平成

1．遠陽榛原人

元治元年5月20日（1864年6月23日）“太陽の東天に出づると共に”壬太郎は，遠江国榛原郡中川根村上長尾（現・静岡県榛原郡中川根町上長尾）の里正・医者の家系につながる旧家に，高木源左衛門・その子の長男として生まれた[1]。

古くからの友・池田次郎吉は，壬太郎と故郷を次のように形容している。

〈…花橘も茶の匂ひと歌はれた静岡県でも，特殊なる茶の産地に川根と云ふ処があります。川根の地は前に大井川の清流控へ，後に緑の山を負ひ，空気清澄塵芥の揚るなき為茶の葉は自然に清く，之をもつて製したる茶は茶碗の底に沈澱物が殆溜らないといふのを以て有名であります。此清き茶の産地川根こそ我坎堂高木先生が生れられた土地なのであります。香ばしきかほり，すみにすみて底迄濁りなき程の清らかさ，シカモ其中に，人の疲れを癒し睡りをさますの力を持つて居る川根の茶，それは敬虔なる神の僕，有徳なる君子人を表徴するに近いものではありますまいか。果然彼と是とは共に山高く，水長きの間に生れたのであります。〉[2]

壬太郎は，生涯の“一番幸福な時”を霊妙なる“長尾ノ山，大井ノ水”に触れて過ごした[3]。

“遠陽榛原人”[4]を称する所以である。

義経や弁慶の話を好み，絵に描いて無邪気に遊ぶ壬太郎も，六歳で河村三郎左衛門（号・半山）に就き，白読を学び，「論語一巻を以て生活の規範とせよ」と教えられ，孔子の文彩につつまれていく[5]。

外形的文明による旧物破砕の轟音が，この僻遠の地にもとどいた。没後，「一ともとに咲きし黄菊と白菊の散りても庭に香ぞのこりける」[6]と謳われた八木又左衛門・高木源左衛門兄弟は〈今日でいう自由人〉[7]。福沢諭吉の開国思想を喜び，家人はもとより近郷にまでその説を教えてまわったという[8]。八，九歳の頃から，『西洋事情』『訓蒙窮理図解』『世界国尽』『学問のすゝめ』『童蒙教草』『民間雑誌』『文明論之概略』『学者安心論』などは“家庭の教科書”となり，諭吉の，旧思想を破壊して新思想を扶植した意気と，権威や勢力におもねない独立独行の自尊の精神が，しらずしらず壬太郎の向学心を奮い立たせた[9]。

基督教を聴いてから，精神的文明＝西洋の道徳をなおざりにする諭吉に，“慊焉の情”をいだいたこともあったが，四民同権を主張し，明快暢達，時代の要求に鋭く応じたこの“遠見なる大革命者”を，壬太郎は「最も好める人物」の一人として敬い続けている[10]

学制発布にともない明治７年１月21日，智満寺（高木家菩提所）の大伽藍を校舎にあてて開かれた浜松県第三中学区二十六小区長尾学校（大区長・岡田清直，小区長・八木又左衛門）へ入学[11]。〈三州（＝豆駿遠）民権ノ祖先〉と呼ばれた浜松県学区取締の河村八郎次が，大井川上流地方巡視の際，「今日勉めずとも，明日ありと云ふことなかれ」（『小学読本〔巻之三〕』）との訓に励まされ学にいそしむ〈全校の模範〉＝壬太郎に目を見張ったのは，翌８年頃のことである[12]。

明治９年，長尾学校（遠江国十三番中学区第二百四番小学）は，児童の智能を啓き〈文明各国ノ上流ニ出ンコトヲ冀望〉[13]する又左衛門らの骨折りで，諏訪の森を拓いて建てられた杉皮葺平屋の新校舎に，「県下屈指の教育家」＝近藤鈴太郎を迎えた[14]。開校式に「祝詞」を読みあげた生徒総代は壬太郎である。鈴太郎の回想に，少き壬太郎の面目があらわれている。

〈明治九年七月余浜松県瞬養学校（当今ノ県立師範学校）訓導タリシガ長尾ノ人八木又左衛門高木源左衛門渥美重右衛門等力ヲ協シテ村内ノ人ヲ励シ力ヲ奮ヒテ学事ニ尽瘁シ他ニ先チテ校舎ヲ新築シ（コノ頃県下ノ学校多クハ寺院ヲ以テ仮校舎トセリ）学区ノ学齢児童悉皆入学セシム（コノ頃何レノ小学校モ学齢児童ノ五六分ノ就学ナリ）斯ク勉励スル小学校ナルヲ以テ県下他ノ小学校ノ規範タラシメントシテ特ニ時ノ県令余ニ命シテ長尾小学校へ派遣シ教鞭ヲ執ラシム此時該校ノ生徒百弐参拾名ニシテ此ヲ五六組ニ別チ助教員一人ヲ使用シテ授業セリ　余ノ始メテ此地ニ到ルヤ玲瓏タル玉ヲ含有スル璞石ノ若キ小童アリ怜悧ニシテ進退周旋常ナラス此ノ山間僻地ニシテ此人アリ即壬太郎氏ナリ　壬太郎氏質朴穎悟ニシテ強記見ルコト聞クコト一タヒ耳目ニ触ルレハ直ニ之ヲ吸収シ再ヒ忘ルゝコトナシ故ニ余モ面接スル時常ニ妄言ナラス何事モ信実ナルコトヲ旨

トシテ応接スルコトニ注意セリ　前ニ云ヒシ如余ト助教員壱人トニテ五六組ノ生徒ニ授業スルコトハ手廻リ兼ネ生徒中ヨリ一両名ツヽ選抜シテ授業ヲ手伝ハシメシガ其中ニモ多クハ壬太郎氏ヲ選抜セリ授業時間五時間中二時間或ハ三時間授業ヲ手伝ハシメ残リ二時間自己ノ教授ヲ受シム時アリテハ五時間手伝ハシメ授業終リシ后特ニ二三時間自己ノ授業ヲ受シメシコトアリ　斯ノ若ク授業ヲ手伝ハシムルニ当リ時ニ壬太郎氏年齢十二年何ケ月ナレドモ恰モ大人ノ若クニシテ生徒ヲ扱フニ叱ルヘキハ之ヲ叱リ誉ヘキハ之ヲ誉メ学業ヲ授クルコト丁寧懇切ニシテ業ヲ受クル生徒能ク之ヲ解シ服従シ教場粛静ナリ　壬太郎氏放課時間運動場ニ出テ活発ニ運動ハスレドモ他ノ生徒ト争フ如キコトハナク他ノ模範トナリテ争フ者アレハ能ク云ヒ含メテ承服セシム故ニ生徒中誰人モ皆壬サン壬サント云ヒテ常ニ慕ハサルモノナシ　前顕ノ若ク他ノ生徒ノ服従スルハ伯父八木又左衛門氏ハ榛原郡ノ副区長父高木源左衛門氏ハ長尾村ノ戸長在勤ニシテ夫等ノ因縁ト云フ所モアレドモ性寛容ニシテ自ラ人ノ服従スルニ由レリ或ハ時ニ戸長役場ニ行キ役場ノ事務ヲ手伝フコトモアリシカ役場ノ人モ壬サン壬サント呼ヒ之ヲ侮ルモノアルコトナシ或ハ子供ト思ヒ嘲弄スルモノアリトモ壬太郎氏決シテ之ニ抵抗スルコトナク彼ハ斯ノ如キ人物ナリト云ヒテ之ヲ放棄シ又余ニ某ハ斯々ノ人物ナリト語リシコトモアリ此レ等ノ人ヲ観ルノ鑑アルニ至テハ通常ノ大人モ及ハサル所ナリ　其頃ノ小学校ハ下等八級上等八級ニ別チ六ケ月毎ニ試験ノ上七級六級五級ト順次昇級セシムルコトトナリ居レリ而シテ余ノ始メテ該校ニ赴任セシトキ下等三級ヲ最上トシ下等八級マテ六ケ級ニ別チ居レリ而其下等三級生徒ハ壬太郎氏ト他ノ一人ナリキ而シテ壬太郎氏ノ其学力優秀且勉励非常ナルヲ以テ余在校僅三四ケ月中ニ第三級ヨリ第二級第一級ト進メ終ニ下等全科卒業セシメタリ（伯父又左衛門氏曰ク余リニ躁進ナラスヤト余曰ク其学力アリテ相当級ニ進ムルニ何ソ憂フルニ足ラン此年下等全科卒業セシモノハ遠州ニテ壬太郎氏及嘗テ文部次官タリシ岡田良平氏（＝明治５年２月から４年間，佐野郡倉真村公立小学校に在学）其他数人ニ過キス而シテ下等全科卒業セシモノハ無試験ニテ県立師範学校ヘ入校シ得ルコトニテアリキ）　壬太郎氏ノ質朴ナルハ土地ノ粋ヲ得タルモノ而シテ此レニ加フルニ穎悟強記ヲ以テシタルナリ　斯ノ若キ人ヲ徒ラニ奥山ニ捨テ置クハ惜ムヘキモノト思ヒ静岡県立師範学校ヘ入学セシムヘキコトヲ余ヨリ伯父君及父君ニ勧メシニ学資ナク且ツ此ヲ離レテ他所ニ出テタトヒ人物トナルトモ家ノ為メトナラスト云ヘリ余曰ク学資ナクハ何トカ方法アルヘシ且此ノ如ク俊秀ナル人物ナレハ成業ノ後ハ豈村ノ為トナルヘシト云ヒ其儘（現ニ浜松県廃セラレテ静岡県ヘ合併セリ）余ハ第十三番中学区（即榛原郡鬼頭郡磐田郡）巡回訓導ヲ命セラレテ長尾学校ヲ去レリ併シナカラ徒ラニ壬太郎氏ヲ奥山ノ人トシテ遺シ置クハ呉々モ惜ムヘキコトト思ヒ其後書面ヲ以テ伯父君ニ学資ナクハ余貸シ与フヘシ返金ハ為ストモ何レニ（以下欠）〉[15]

百事草創の中，「連語図」『小学読本』『学問のすゝめ』『輿地誌略』などを教材に[16]，“賢き忠実な教師”と親愛すべき学友とによって“美しき要素”を育まれ[17]，明治10年秋，下等小学全科を修

了。ただちに，「志ある者は単身万里をも往く」と励ます父の気持ちをくんで，遠州掛川村の漢儒（蘭学者とも）・岡田清直の家塾に入り，かたわら掛川学校へ通うことになる[18]。

“…菜圃緑肥エ麦隴黄熱シ野ニハ則チ紫蕨ヲ采リ水ニハ則チ香魚ヲ漉ス筍ヲ幽篁ニ得テ晨ニ之ヲ厨シ荷ヲ小池ニ取テ夕ニ之ヲ烹涼宵雨ヲ幽斎ニ聞テ親友ト桑麻ヲ談シ暑日榻ヲ緑陰ニ移シテ隣翁ト芻蕘ヲ話ス其見ル所ハ青山碧水ニ非サルナク其聞ク所ハ樵歌村笛ニ非ザルナシ亦峨豈世上ニ功名富貴ノ事アルヲ知ランヤ…”[19]

遠陽の純美な自然と淳厚な人々とによって織りなされた原風景をあとに，立志なる笈を背負い，狭い郷里の天地のほか見たことのない十三歳の少年は独り，病弱な母の心配を引きずりながら，西南戦争の後の政論打ち寄せる実世界を指して，苔なめらかな小道をたどり金谷から佐夜の中山を歩いた[20]。

2．静岡師範學

父源左衛門の反対にもめげず，伯父八木又左衛門には夜を徹して迫り，ようやく許しを得た壬太郎は，明治11年春，追手町の堀端に灰色ペンキ塗り木造二階建の当時としては大建築を誇る，県下最高唯一の学府・静岡師範学校に入学する[21]。

“…盖シ学問ハ窮極ナリ又際限ナシ豈迫々トシテ父母ノ膝下ニ匍匐シ碌々トシテ郷村ノ区内ニ蟄蹙シテ而シテ能ク其蘊奥ヲ極メ其目的ヲ達スルヲ得ンヤ夫ノ古来抜群ノ功業ヲ奏シ休光赫々千載ノ下ニ輝クモノ多クハ少壮家郷ヲ辞シテ万里ノ異郷ニ遊学シ其ノ師ノ薫陶ヲ蒙ルト自己カ艱難辛苦ヲ経検スルトニ依テ其智識ヲ益シ其才幹ヲ大ニセシニ非ルハナキナリ見ヨヤ見ヨ夫ノ秦王ヲ輔テ其業ヲ皇張シ支那ニ雄視シタリシ英雄ヲ見ヨ当年虱ヲ捫シメ天下ノ務ヲ談セシ華陰ノ一寒書生ニ過キサルニ非スヤ見ヨヤ夫ノ「ブリンネ」ノ兵学校ニ悪戯児童ノ魁タリシ鰍生ヲ見ヨ遂ニ欧州全土ヲ席巻シテ威ヲ五大州中ニ及ホセシノ豪傑ト為リシニ非スヤ然リト雖ドモ如此ハ王猛挨拿破侖ニシテ初メテ能ク之ヲ為ス可シ豈平人凡士ノ能ク及フヘキ所ナランヤ夫レ然リ豈夫レ然ランヤ王猛拿破侖同ク其レ衣ヲ温ニ取リ食ヲ活ニ求ムルノ人ナリ何ソ及不及ノ理アランヤ若シ夫レ之レアルハ畢竟其ノ心事ノ如何ニアルノミ然リト雖ドモ臨河羨魚，不如帰家織網，瑞軒子性質学問ヲ好ミ口常ニ人ノ功業ヲ称スルモ若シ夫レ只之ヲ好ミ之ヲ言フノミニシテ之ヲ身ニ行ハサレハ所謂河ニ臨テ魚ヲ羨ムモノナリ豈何ソ畢世事ヲ成スヲ得ンヤ宜ク其本ニ反テ自ラ行ヒ自ラ勉テ其功ヲ成シ其業ヲ遂クヘキ道ヲ講ス可キナリ於是明治十一年三月父母ニ請フテ断然家郷ヲ辞シ笈ヲ負フテ静陵ニ遊フ…”[22]

静岡に来て間もなく，師範黌と外壕の石垣を隔てて城内西北隅に建つ石造二階屋の異人館あたりに，二人の西洋人—カナダメソジスト教会派最初の宣教師・マクドナルド Davidson MacDonald とその妻—を見かけた[23]。家が曹洞宗に属し，祖母せい子が神職の出で，母もおのずと敬神の念深く，神仏への尊崇を教えられてはいたが，時代の風潮に揺らぎ，宗教には極めて冷淡になってしまっていた壬太郎の〈豆大ノ眼晴〉[24]には，多くの困難に遭いながらも常に敬意をもって日本人に接し，十一名の英学生を初穂とする授洗者百拾余の成果をおさめ，一時帰国直前の〈人民の品行を改良する法教師〉[25]の質朴な巨躯も，音楽・英語・手芸・料理などを通じ婦女子教育を実践し，夫の活動を支える麗容も，ただ“物珍らしく”映るだけであった。(後に壬太郎は，マクドナルドを“嘗て知れる最も潔白にして最も同情に富めるクリスチヤン，ゼントルマン”と三十有余年に及ぶ日本伝道の功業を称え，明治38年２月の追悼会では新約聖書を朗読して心からの感謝を表している[26]。)

寺子屋の師・河村半山に消息をしたためて二旬あまり後の11月４日，師範学校は，洋風を競い仁義忠孝を軽んじる学制以来の教育を憂えて北陸・東海を巡り「教学聖旨」を起案する天皇の参観を受けた[27]。蜂屋定憲校長をはじめ門外西側で迎える訓導・生徒の列に壬太郎の姿があったはずである。高覧に浴した「生徒作文帳」には，奥村孚・芹沢潜ら旧幕府昌平黌の碩学に就いて論孟や韓愈・欧陽脩・蘇東坡を学ぶ壬太郎の習作も綴られていただろう[28]。

〈明治の中期に於て静岡の持つた双璧〉[29]とたとえられ最も親しく交わることになる天才的な文章家・山路弥吉（号・愛山）との出会いは，弥吉が，壕頭学校（師範学校と隣り合わせの附属小学校）の上等三級を修了したところで学資がつづかず，同校の助教員となった明治11年か翌12年頃である[30]。

弥吉の「現代日本教会史論」(『基督教評論』M39）に〈…余は当時を回顧して日本人民の獣欲を抑制すべき威権の甚だ微弱なりしを驚かずんばあらず，…余の自ら記憶する所に依れば静岡師範学校の学生は其頃東京新誌（＝漢文戯作雑誌）を読むもの少からざりき。…〉とある。壬太郎はこの悪風に謹厳をもって当たり，〈同窓何れも眼を刮して懼れを懐かざるはなく，教師も亦同じ名後世上るべしと評し合へる〉ほどに名声を広めた[31]。

同じ頃，明治12年，〈静岡師範学校の秀才〉＝壬太郎は，一等小学師範学科から新設の高等師範科に転入する。同級生・根岸貫がその経緯を書きとめている。

〈…僅か五人の一学級なりしことは，余り贅沢にして不審に思はるゝ次第なるが，此頃の学務当局も，小学校教員養成と共に，中学校及師範学校教員養成の必要を感じ，師範学校生徒中の優秀なる者を抜いて，更に高度の教育を受けしむべき計画を案じ，第一回は明治十一年に，三人（黒川正，平賀敏，望月宗一）を慶応義塾に県費を以て留学せしめたるが，其卒業期の明治十四年には，次で三人乃至五人を留学せしむる意志にて，其の準備の為め特に五人の一学級を編成せしも

のなり，仮に称して高等師範科と云い，教科目は専ら英学漢文に重きを置き，記憶に存する限りに於ては，スキントン万国史，チヤンバー中古史及近世史を用ゐ，語学には英国人をさへ傭はれて，教授時数は英学科が約半ばを占め，漢文科にては通鑑覧要，左伝，易経，春秋等に及び，科学にてはロスコー化学の原書に依り，些かなれども其実験をもなしたりしなり。…〉[32]

「北辰（＝至徳の天子）と衆星（＝天子とともに天下的世界観を共有し下の政治をたすける賢臣たち）」（『論語〔為政第二〕』）を仰いでは，この時はじめて学んだ英語の読本（Mason, L. W. 『Primary or First Music Reader』1875）の詩「Twinkle, twinkle, little star」を口ずさみ，『酔古堂剣掃』（明末の文人・陸紹珩が腐敗社会の一掃を願って編んだ文学的抒情的清言集）を修養の拠り所に“異日済黎民”を念じながら，明治14年の慶応義塾への遊学を待ち望んでいた壬太郎に最初の挫折がおとずれた。学務当局の計画の基礎が弱く，明治13年の県会で派遣中止と決まったのである[33]。

壬太郎が，「男子空しく死なず」と励みあう弥吉と，印刷事業の発達していない当時，青年書生の間で最も高尚な快楽とされた文学雑誌の刊行を思いついたのはこの頃のことであろう。二人は，すでに文学雑誌『弘智新誌』（M13．9創刊）の編集に携わっていた増田富次郎にその手続きについて教えを請うている。

〈私（＝富次郎，のち守一と改名）が青年時代静岡で小学校に従事し其の傍ら琢磨社（＝静岡東草深町）といふ社員（＝湊省太郎もその一人）組織で詩文を蒐集せる月刊雑誌花叢相談（＝M14．1創刊）を発行して居ました時分に親友の伊藤鉉一郎氏と竹馬の友山路愛山氏との御紹介で高木君に始めて御目にかゝつたのでした。それは君が愛山氏と倶に「呉山一峰」といふ雑誌を発行されるに就て其の準備や経営方法などの御相談を受けたのでした。…〉[34]

明治13年10月，『呉山一峰』（金主亮の詩「呉山」により芹沢潜が命名）創刊[35]。

同じ頃，同窓の戸田鉦吉と雑誌『美学珠林』を発行し〈文学教学連馳〉を実践していた根岸貫は，その実情を次のように記している。

〈…文学雑誌「呉山一峰」は本局を「行余社」と称し，主幹兼編輯人に山路弥吉と署名したるが，実は重に師範学校同窓生の計画にて，局名や編輯人署名抔は，県立学生の身分として，印行上に許されがたかりける為に，此頃より既に，学校以外に自由研究の天地を有せる山路弥吉氏の名を借り，尚且「行余社」の所在地には，同じ山路氏の寓所（＝静岡鷹匠町１丁目47番地）を充てたるものなりき。されば数号の発行を重ねたるに拘らず，将又山路氏は，此頃早くも家康論の執筆ありたる程なるにも拘らず，同氏の一文を認めず，高木坎堂并に増田香山（高木氏親友増田龍

作）両氏の文章斗りが，変名をさへ加へて毎号を賑はし，山路氏としては，未だ愛山といはず当時偃蹇独夫と誌されて，逸詞と題したる詩歌欄に，義経賛なる韻文を観るに止まれり，…〉[36]

〈静岡あたりにては国会開設の請願に師範学校の先生さへも署名し，土地にて幅利きの人物は大抵其運動に加勢〉[37]するほど民権論流行の時，壬太郎の志も政治界にあった[38]。『函右日報』紙上で〈請願の障壁を高ふし・建白の衢路を塞ぎ・熱望を沮圧し・貴重の民権を蹂躙せんとする紊権家〉[39]の非を打つ呉山小史（行余社社員か）に呼応するかのように，壬太郎は，この画仙紙十ページ前後の小雑誌に若き火群を吐いた。

“…近時世ノ学生其目的ヲ期スル近小其心志ヲ持スル卑劣ナルモノアリ之ヲ以テ朝ニ顕門ニ諂ヒ夕ニ貴邸ニ媚ヒ千状万態辛フシテ一資半級ヲ得ルトキハ叩然自ラ許スニ英雄ヲ以テシ一擲千金花柳ニ遊ヒ嘗テ恥チス唯競慄是レヲ失ハンコトヲ恐ルヽモノアリ或ハ学窓三年僅ニ数巻ノ書ヲ読終ルニ及ヘハ則チ知足ノ病頓ニ発生シ揚々自ラ任スルニ碩学ヲ以テシ口ヲ開ケハ則喋々民権ヲ説キ筆ヲ下セハ則嘖々自由ヲ論シ以為ラク我目的既ニ達スト亦進テ事ヲ為スノ気力ナシ噫夫レ如此輩果シテ能ク其大業ヲ経営シ其責任ヲ尽スコトヲ得可キ乎吾儕ハ未タ之ヲ知ラサルナリ若シ夫レ天下ノ学生ニシテ如斯クンハ誰レカ能ク後来ニ我帝国ノ独立ヲ維持シ我帝国ノ開明ヲ進捗シ我帝国ノ学術ヲ精窮シ我帝国ノ民福ヲ計画スルヲ得ルモノソ豈憂フヘキノ至ニアラスヤ…抑モ吾儕学生ハ誠ニ其責重ク其任大ナリ我日本帝国ノ隆替亦一ニ是ニアラントス可ラサルナリ励マサル可ラサルナリ　…夫レ人志ス所浅近ナリ志ス所高尚ナレハ其達スル所遠大ナリ而シテ世動モスレハ徒ニ小成早達ヲ慕テ姑息苟且ヲ事トスルモノアリ噫此輩一生果シテ何事ヲ成シ得ヘキソ乞フ宜シク此等ノ文ヲ再三玩読セヨ亦少シク覚悟スル所アルヘシ”[40]

基督教に拠り高潔な品性を養うという「生涯の事業」へ収束する〈焦燥（エートス）〉[41]を発散させながら『呉山一峰』は，莫逆の友・山路弥吉（明治14年『呉山一峰』閉刊後？静岡県警察本署御用掛に就く）に支えられ，初めの目的どおり卒業の日まで七，八号を発行して一校学生の士気を振るい周囲の畏敬を集めた[42]。

天下をもって任じ，擬国会で自由保護貿易の可否を討論したり，『静岡新聞』に国会開設や条約改正を訴えたりもして[43]，文章に対する天成の素質をみとめられ，〈校内弁論界の雄〉とたたえられた壬太郎は，前途の困難を知らせるような風雨たける明治14年５月７日，蜂屋校長・織田顕次郎教頭・辻芳太郎監事列席のもと，特別優秀の成績で，自由・独立・進歩・濶大の染み入る卒業状を手にした[44]。その二日後，“噫王猛カ功拿破崙カ業誠ニ大矣誠ニ偉矣瑞軒子未其千億分ノ一タモ真似ルコト能ハスト雖ドモ尚向后勉メテ倦マス学ンテ怠ラサルアラハ豈何ソ其千億分ノ一ニ至ラサルヲ必センヤ…着錦帰故郷ハ未タ之ヲ言フ能ハサル也”[45]と自分を厳しく戒めて一先ず故山へと向か

う。

3．小学先生

明治14年８月29日，学政の総攬者・蜂屋定憲の要請により，〈静岡の教育界における最も有望なる新人〉＝壬太郎は，「政治界に雄飛せん」との思いを抱いたまま，磯部物外（静岡県会初代議長の責任を果たし，民権思想の鼓吹につとめ県下青年の信望を得ていた静岡師範学校監事）の頂門の一針＝“小学教員タルモノハ往々聞見ヲ狭隘ナラシムルノ恐レアリ且妙齢ノ士ヲシテ之ニ従事セシムルハ実ニ国家ノ一大不幸ナレドモ亦止ムヘキナシ只能ク黽勉倦マス後来ノ図ヲナスヘシ”[46]を胸にとめて，育英の業の第一歩を駿東郡御殿場村立中郷学校（現・御殿場市立高根小学校）に標した[47]。三ヵ月後（11月27日），公立中郷学校の新築開校式が執り行われている。

〈…当日静岡県令大迫貞清，駿東郡長窪田凸，静岡県学務課長蜂屋定憲，前駿東郡長江原素六，駿東郡書記森田吉祥等ノ諸氏臨場セラル又地方招待員ニハ御厨教育会区域内ノ各学校長訓導学務委員其他本校ニ縁故ノ諸氏等ニテ其数十名ナリシ然シ午前十時ニ至リ轟然タル祝煙空ニ靉クト共ニ大迫県令諸属官ヲ率ヒテ旅館（杉山源十郎氏ノ宅）ヨリ来校セラルヽヤ本校訓導高木壬太郎職員生徒ヲ引率シ総代戸長学務委員建築係特志者等諸員ト共ニ門外ニ整列奉迎セリ而シテ本校訓導学務委員等諸官ノ先導ヲナシ楼上ノ来賓休憩室ニ誘フ暫クシテ式場準備完ク整ヒ第一祝砲ノ轟クヤ総代戸長本校訓導ノ先導ニテ県令諸官臨席セラル…次ニ蜂屋静岡県学務課長祝詞ヲ朗読ス　次ニ窪田駿東郡長ノ祝文　次ニ本郡前ノ郡長江原氏ノ演説アリ　次ニ本校訓導高木壬太郎答辞ノ祝文ヲ朗読ス…　次ニ有志者ノ祝文祝歌等終リテ第二ノ号煙アリ是ニ於テ式終リテ一同退場休憩室ニ入リ暫クシテ第二鼓ノ響クヤ来賓及参列員一同楼上楼下ノ宴会室ニ入場饗宴アリテ十分ノ歓ヲ尽シ皆祝意ヲ表セザルハナカリキ時ニ午後四時ナリ是ノ日余興トシテ昼夜数百ノ煙火ヲ打挙ゲタルヲ以テ遠近ノ老幼群集シ校堂ノ近傍実ニ立錐ノ余地ナキト云フベク其ノ盛況筆紙ニ尽シガタカリシ…〉[48]

昼は学童の教育に全力を注ぎ，夜は政治・歴史・哲学・文学などの書に親しむ間，社会教育の効用を大いに啓発して良風を守る，博学で覇気に富み弁舌明快な十七歳の校長に，厚い尊敬が集まった[49]。

滝口源太郎（明治15年上等全科卒業。のち高根村村長をつとめる）ら教え子の回想からも，郷村の木鐸の音容が伝わってくる。

〈…当時の教育法といへば今日より見て非常に低くかつたもので（低いとはあながち悪いといふ

意味ではありません）注入主義より外なかつたことゝ思はれるが先生の教育法も注入主義であつたと考へる而も生徒の個性を重んずることは非常に深かつたもので当時個性観察簿を作り休憩時等教師監視の外にある生徒の挙動や行為や遊戯等に於ける状況を明細記録して参考したもので吾々も教室の窓から先生が運動場を眺めて居ることに気が付いた時は何だか怖く思つた（怖がらせる為ではないが）是等は先生の明なる所で近時個性尊重の教喧しきを思へば実に敬服に堪えない…先生は学校内部の教育に力を注がれたる外学校以外則ち社会教育にも注意せられた故に卒業生を集めて夜学を開きよく指導誘掖の任に当らる　又常に飲酒の害を説かれて地方風俗の善導に力を尽された是其の当時にありては何れの地方にても自家用の酒を醸した人にも賄め自らも飲み自然飲酒の風習があつたからである。…〉[50]

〈学校のやり方を変えた先生〉[51]と高根の人々に強い印象を与えた壬太郎は，のち青山学院長になってから，当時の“講釈的注入的教育法を以て品性を強いんとするが如き愚”[52]を痛く思い起こしつつ，夏の御殿場に講演や静養の足を運んだ[53]。

“泰西史鑑。パーレー万国史。西国立志篇。勧善訓蒙。等を読みて泰西文明の淵源する処あるべきを思ひしかども基督教を研究せんとの志は未だ起ら”ず[54]，前に静岡浅間神社で聞いた高木喜一郎（交詢社社員）の耶蘇教攻撃演説を論拠に儒教主義を高唱して信者の非難を浴び，「個人間の論争に止まりては面白くないから新聞紙上にて論議せん」と圭角をあらわにしたのも中郷学校在職中のことである[55]。

再び自由の嵐，民権の雨すさぶ中，壬太郎は―教職のためか，八木伯父や福沢諭吉の感化によるものか―[56]身を政党の外に置きながら改進党（静岡改進党は〈皇室ヲ無窮ニ奉戴シ下人民ノ権理自由ヲ伸暢シテ国家ノ福祉ヲ全フスル〉ことを目的に，磯部物外らにより全国に先駆けて結成された）に傾き，『静岡新聞』に政論を寄せたり，御厨懇親会で伊藤欽亮（静岡県改進党員）を支持し土居光華（岳南自由党員）を攻めるなど，進んで壇上の人となった[57]。

集会条例が改正され「黙れ訓導」[58]の暴声高ぶる夏，静岡師範学校に開かれた改正教授法伝習会に出て御厨教育会幹事の職責を果たし[59]，また校長訓導の政談演説と政論の禁止が布達されて十八日後（11月3日）には，中郷学校の教員・生徒と世事を逃れ金時山の紅葉を楽しんでいる[60]。壬太郎は秋を最も好んだ。「秋紅」という筆名もある[61]。

その年の冬，根岸貫から一通の手紙が送られてきた。

〈…我等年壮にして小学に老ゆるは豈遺憾ならずや。教育者たらば何ぞ大教育者たるを志さざる，恨む所は学資なきの一事也。謂ふ相共に助けて更迭東都に遊ばん，初め三年は余君の為に資を供せん，君先づ遊学せよ，後の三年は君帰り来りて余の為に資を供せよ。…〉

壬太郎は早速この計画を蜂屋学務課長に相談するが賛成は得られず，天下ならぬ県下教育の枠の内につなぎおかれた[62]。

偏狭な忠孝仁義説を内容とする「幼学綱要」が布かれて一ヵ月あまり後（明治16年１月５日），静岡師範学校設立以来はじめての卒業生同窓会が，平賀敏・伊藤鉉一郎・望月宗一・横山幾弥・高木壬太郎・根岸貫・増田龍作らによって開かれた[63]。永峰弥吉（静岡県大書記官）の聖諭〈彝倫道徳ハ教育ノ主体・方今学科多端本末ヲ謬ル者亦鮮カラス年少就学最モ当ニ忠孝ヲ本トシ仁義ヲ先ニスヘシ〉の朗読を耳に，〈憤慨ノ熱血ハ溢レテ彤管ニ滴リ悲憤ノ肝胆ハ破レテ激舌ニ燃エ或ハ論文ニ或ハ演場ニ堂々国家ノ時政ヲ談論シ天下衆人ノ耳目ヲ驚撹シテ苟モ一国ノ改良ヲ謀ラントスル〉[64]壬太郎ら居並ぶ民権党は，重なる取り締まりと再編策に処世の路を踏み迷っていた。

山路弥吉に〈余輩少年彼の影を望で走れり〉と言わせた曾田愛三郎（岳南自由党員，『東海暁鐘新報』主幹）[65]が東京に去ったあとの静岡で，なお自由改進思想を喧伝する土居光華や城山静一（『大阪立憲政党新聞』社員）・西村玄道（『自由新聞』印刷長）ら名のある論客に対抗し，警部の臨監する政談演説会場に客気をふるったのは同年３月頃のことである[66]。

12月，上御厨教育会長を兼務する小学校長は，その功績により静岡県から下された白紬一反を携え，二年四ヵ月ついに東駿の地を後にする[67]。

壬太郎十九。〈廟堂ノ上ニ立テ天下ノ枢機ヲ握ラン〉か，〈民間ノ木鐸トナリテ公衆ノ与論ヲ左右セン〉か，〈学問ノ真理原則ヲ講窮シ碩学大家トナラン〉か[68]。頼る資もなく人もなく，“東漂西泊・志業常ニ蹉跎トシテ進マズ”[69]。

4．田舎官吏

静岡改進党の解散が報じられて二ヵ月後の明治17年７月，二等訓導に昇任。榛原郡長・河村八郎次に招かれ，小学校巡回訓導（遠江国榛原郡書記・十四等相当）に就く[70]。

御前崎学校初等科試験が終わったあと（10月29日），果てしなく広がる海原を眺め渡航の日に夢を走らせる壬太郎は，福沢諭吉の『時事新報』（「布哇ニ行カス米国ニ行ケ」M17.11.7参照）や根岸貫から贈られた『洋学軌範』（仁田桂次郎著，M17.9）などにも触発され，思いつのって密かに米国へ渡ろうとするが，泣いて止める母の前に雄志は熄んでしまう[71]。

明治18年４月10日，人生の一大不幸が壬太郎を襲った。倚門の母・その子が，“恨ムラクハ児ト起居相共ニシ又児ノ閨門情濃ニシテ呱々タル愛孫ノ顔を見ルニ及バザルヲ”との繰り言を遺し，四十二歳を一期にこの世を去ったのである[72]。

壬太郎はこの時，『平家物語』『源平盛衰記』などから悲哀の思想を強く印象づけられていたこともあって，世の中のいかにも頼りないこと，人の命の朝露のようなものであることをしみじみと悟った[73]。

憂いの獄舎と化した静波の下宿（大石久吉宅二階）の真向かいの大石家（本家）に，壬太郎意中の人・梨花（明治２年10月14日生，大石五郎平・きし長女）がいた[74]。

志望とかけ離れていながら，よくこれまでの注入主義を改め〈観念開発ノ主義〉を小学教員に説きめぐり，榛原郡の教育史を一新，静岡県から“職務勉励ノ廉ヲ以テ金参円給与”され，後になって“余嘗テ此郡に教育の任を掌り，余の知人今尚多く此地に住す”と懐かしむ壬太郎ではあったが，当時人々に向学心なく，教員の一部と衝突などもあり，７月，八郎次らの慰留を振り切り辞職[75]。蜂屋定憲（学務課長兼衛生課長）の薦めにより，８月１日，静岡本庁衛生課（准判任御用掛）に転ずる[76]。

母を亡くした壬太郎には栄進も虚しく，静岡市中夜更けまで基督のありがたきを説く耶蘇教信徒の孤軍奮闘ぶりも知らず，慰めを求めて不夜の街をさ迷うばかりであった[77]。

“…此迄は生死の問題の如き曾て念頭に浮かびたることなかしが，最愛の母を喪ひては此問題に逢着せざるを得ざりしなり。然れども当時一般に宗教的気分乏しく殊に静岡の如きは俗悪風をなし，余が先輩にして余を導き斯る風に誘はれ，酒を煽りて鬱を慰むるが如き道に赴きしが，此は却つて良心の苦痛に逢ふのみにして，それより何等慰安を得ること能はざりき。…”[78]

まさしく“上に向て進むか，下に向て堕落するか・神と結ぶか悪魔と結ぶかの結着点”[79]にあった時，『六合雑誌』誌上，安井息軒の「耶蘇弁妄」を駁し基督教の真相を明らかにしようとした「弁妄批評」[80]の著者・平岩愃保が静岡教会に着任（明治17年５月）すると，その卓抜な英語力を頼み教会に出入りしていた山路弥吉（この頃，静岡県警察本署御用掛を辞めたと思われる）や太田虎吉（前・志太郡小川学校長）・池田次郎吉（父三浦定吉経営の書店・擁万堂番頭）らに導かれ，壬太郎はついに西洋文化の入り口ともいえる“温暖掬すべき家庭”の扉をたたいた[81]。

牧師となって人間の霊魂を救おうとしたのではなかった。〈将来社会に活動せんには漢学と英語を修めさるべからず自己の意志思想を伝達するには文章に因らねばならず文章は漢学の力に俟たねばならぬ而して広く世界の事情に通ずるには外国語を知らねばならず外国語は世界的な英語を修めるに如くはない〉[82]と十六，七歳から始めた英語の研学が主な目的であり，弥吉らとは「英語は教はるが断じて耶蘇信者にならず」と誓い合い，平岩の示した「無報酬で好い，其代り・英語は一週三回，月水金曜に一時間宛教へるが其後でバイブルを一時間聴くことゝしやう」という約束も守らず，英語聖書講義には二，三回出ただけであったが[83]，この〈存在が極めて短かく，時間さへ僅だつた・英語会〉[84]が，壬太郎ら静岡の青年の知識欲を刺激し，信仰に入るきっかけをもたらし，端なくも世路を決めるものとなった。

基督教演説会[85]の盛況が人心に灯りを点す秋，〈強迫入門〉[86]を厳しく拒みながら信仰を告白（明治19年３月受洗）した弥吉は，その頃のことを次のように記している。

〈…回想す明治十七八年の頃我社（＝護教社）発行人平岩愃保氏牧師として静岡教会に在り，彼は其伝道の暇を以て青年を集め英書を教へたり。当時英学の需要太だ盛にして而して地方は教師に乏しかりしを以て許多の青年は喜んで氏の許に集り来れり。而して見よ其結果は少からざりし也。今日日本メソヂスト教会の要鎮たる麻布教会の牧師たる高木壬太郎氏も甲府教会の牧師太田虎吉氏も実に当時平岩氏に従つて狭隘なる静岡教会にスウヰントン万国史の類を研究したる青年の一人たりし也，我社編輯人の如きも亦当時氏が門下に集りて諸子の後に従ひ熒乎たる青灯を囲んで英書の研究に余念なかりし也。知るべし，日本「メソヂスト」教会の一勢力はたしかに破窓茅屋田舎教会に出でし也。当時の田舎牧師たる平岩氏に出でしなり〉〈…我等年少の頃，人生を沙漠の如きものなりと感じ，浮薄の人情を悲みて世に頼むべきは唯自己あるのみと思ひき。然るに耶蘇教は我に神の国と云ふものあるを教へ，神の国の精神的共同生活に入るべきことを教へたり。此時のうれしき感情は一生拭ひ消すべからず。…〉[87]。

行き先の定まらないまま壬太郎は，10月14日，母の遺訓を奉じ，巡回係在職中に一目惚れした庄屋の娘・大石梨花と，河村八郎次の媒酌でめでたく結婚[88]。翌19年２月１日，材木町六十一番地から安西一丁目南裏三十三番地に居を移し，“処世ノ初歩階梯”を履んだ[89]。

国事犯事件が相次いでいた。〈政治的気圧の重畳し来れる〉[90]なかに結成された私立静岡教育会（〈教育上ノ経験ヲ交詢シ互ニ真理ヲ講究シ専ラ教育ノ上進ヲ図ル〉ことを目的に，明治18年12月６日発足。会長・蜂屋定憲，会場・静岡師範学校）[91]・静岡青年会（〈学術ヲ究研シ智識ヲ交換シ務メテ交際ヲ親密ニシ以テ天賦ノ徳性ヲ涵養シ人生ノ本分ヲ尽スニ裨補アラン〉ことを目的に，明治18年12月７日発足。客員・平岩愃保，会場・玄南横町耶蘇新教講堂）[92]の会員となり，また在陵書生親睦会（“在陵書生ノ風儀ヲ改良シ将来一致団結ノ基ヲ開カン”と明治19年２月11日に第一回を両替町芙蓉楼に開く）の幹事をつとめ[93]，小野梓の『国憲汎論』など読む政治青年・高木迂狂（当時の壬太郎の筆名。ほかに迂狂生，東海生，東海迂狂，不為已斎主人など）は[94]，時世を誤らず，〈正しきを踏ましむべき案内者〉[95]をひたすら渇望した。

天然痘が再び流行の兆しを見せはじめていた。壬太郎は新居に落ち着く間もなく，種痘規則説明と衛生視察の職務を帯び，佐野・城東・磐田・豊田・山名・周智六郡へ旅立つ[96]。

三十日，百里の疲労も癒えた３月26日，河村榛原郡長から“今回教育上ノ改革アルニ際シ卿ヲ以テ甚ダ必要トナス願クハ卿再ビ来テ本郡教育ノタメニ努力セヨ”[97]と重ねて懇請されるが，梨花を迎えて処世の感触が変わりこれを辞退する[98]。

角を矯め，〈衛生の統計や報告書文案など余り面白くない仕事をも孜々として鞅掌〉[99]していた壬太郎のもとに，『呉山一峰』の同人で東京大学（古典講習科国書課）に学んでいた田村幸充から一書が届いた。

“…云ク，京地昨冬政府更革以来百事面目ヲ改ム。就中文学ノ如キ和漢陳腐ノ学ヲ舎テ西洋日新ノ学ニ傾クノ勢力筆紙ニ尽シ難シ。大学モ其組織相改リ，古典並別課ノ二科ハ其勢可憫有様ナリ。予ハ文部ノ中学科試験ヲ受ケタリ，和学ノ外恐ラクハ落第ナラン。目下東洋英和学校舎長勤務ス，至テ薄給ナレ共西洋人ニ親昵スルヲ得，云々。又云ク，当時出京中ノ蜂屋林両氏ニ面会ス。蜂屋氏ヨリ君ノ近状ヲ聞知セリ，君上京ノ計ヲナセ，云々。”[100]

かねてからの願いが沸き上がった。

5．運命の関

明治19年夏，壬太郎は，旧自由党員嫌疑拘引事件（静岡事件）によって，学力優等・不羈磊落・侠骨稜々〈静岡学生の花〉[101]と讃えられた湊省太郎の挫折を知らされる一方，〈破窓茅屋田舎教会〉＝静岡教会で聖書の研究に励み，夜おそくまで街頭に立って耶蘇演説をこころみる池田次郎吉・伊志田平三郎・梅原民蔵・太田虎吉・近藤与七・菅沼岩蔵・高橋万策・根岸道・久永勝成・三浦範三・三上季孝・山路弥吉・吉井文三ら〈小さき友人の一群〉を目のあたりにしていた[102]。

8月8日，「判任官十等」の辞令を受け取った壬太郎は，憤然，“上官人ヲ視ルノ明幾分カ乏シキアルニ非ザル歟・悠々日ヲ本土ニ送ル，予ノ素志ニ非ズ”[103]と，静岡師範学校，静岡英学校の恩師・村松一（当時，東洋英和学校講師）[104]に前途をゆだね，専心，神の道を求めはじめる。教育・衛生・勧業の拡張を願って五年がかりで静岡県庁前三の丸の濠端に建てられた「教導石」（賛成員の一人として壬太郎の名も，当時の静岡の有識者81名とともに刻まれている）[105]に蟬の降りしきる暑さの中であった。

グラッドストン William Ewart Gladstone のような，政治界の偉人であっただけでなく文学や神学にも深い智識を備え，日曜日には必ず教会で礼拝したという，閑日月を有する英雄の“秩序ある生活”[106]への憧れが，“人生の一大時期”[107]に出会った壬太郎の《日記》から伝わってくる。

八月十一日　晴　水曜日　…耶蘇教会ニ至ル，今夕教師ノ課題ハ「天父ノ賜」ナリ。
八月十五日　日曜日　晴　…八時教会ニ至リ牧師ノ説教ヲ聞ク。課題ハ「神ノ心ヲ得ルノ道」ニシテ約翰第一書四章廿節ニ就テ講ゼラル。其節ニ云ク，モシ我神ヲ愛スト云ヒテ其兄弟ヲ憎ムモノハ是讒者ナリ，既ニ見ル所ノ兄弟ヲ愛セズシテ未ダ見ザル神ヲ如何デ愛セン乎ト。午後ニ時ヨリ又教会ニ出デヽ聖書ノ講義ヲ受ク。午後八時ヨリ又牧師ノ説教ヲ聞ク。課題ハ「天道ノ鏡」ニシテ約翰第一書三章廿一節以下ニ就テ講述セラル。廿一節ニ云ク，「愛スル者ヨ，我儕ガ心ミヅカラ責ムル事ナクバ神ニ向テ憚ル所ナカルベシ」ト。其大意ニ云ク，人ノ本心ハ鏡ナリ真ノ道ハ光ナリ，鏡磨セドモ光輝カザレバ我形ヲ写ス能ハズ，光耀クト雖モ鏡磨セザレバ

我形ヲ明写スルニ由ナシ，盖シ耶蘇ノ道ハ太陽ノ如シ，此光ニ依テ吾本心ノ鏡ヲ掛ク，正邪明ナラザルヲ欲スルモ得ザル也，云々。

次の例話は，壬太郎が平岩愃保から聴いた十数回の説教のうちの一齣に拠る。

“…私共が初めて基督教の説教を聴く頃には，有神論の証拠として，或る無神論者が船に乗つて暴風に出逢ひ，船の将さに覆らんとした時に「神よ我を助け給へ」と祈つた。其処で此無神論者は，君の無神論は陸上では通用するが海上では通用せぬと揶揄せられたといふ話がある，といふやうなことを能く聞かされたものである。…”“…私共が聖書を学ぶ時には，聖書はインスピレーションを受けて書かれたものだといふ説を先づ仮定して，夫れから聖書を学んだもので，斯かる仮定をして学ばなければ聖書の意味が十分に分るものでないといふやうに教へられたものである。…”[108]

スパージョン Charles Haddon Spurgeon を自任する，伝道心の熾んな信仰の気分に富んだこの〈田舎牧師〉の心血を注いだ説教からこぼれた譬喩や断案は，疑問を惹き起こしつつ，基督教への捷径を指し示す道標となった[109]。

この夏，壬太郎の家の近く（安西一丁目南裏町十五番地）に渋江保が越してきた。〈精神過労のため毎日新聞を止め，遠州の乾へ引込んで暫らく其処で静養して居たが，其後東京へ帰りがけに静岡へ立寄つた処を旧知の前田五門といふ人に取捉へられ・静岡英学校，文武館及び高等英華学校の三校に教鞭を取ることとなつた〉[110]のだという。

静岡英学校は校則を変更し，渋江を教頭に迎えて，９月１日から授業を再開している[111]。壬太郎も弥吉も渋江から英語を教わった[112]。奇辞険句，佶倔聱牙の傾きのあるカーライル Thomas Carlyle を“戒めて読むなからしめんとした・我等の英語の師”とは，また壬太郎が好んだマコーレー Thomas Babigton Macaulay の流麗雅健な『An Essay』の文義を説き明かして見せたのはこの渋江保であろう[113]。同月，高等英華学校（学問教育の独立を一大眼目として，斎藤和太郎・佐倉信武・長谷川善太郎らにより，明治19年８月15日静岡下魚町に開校）に入学した次弟・高木愛助も，渋江から英語を（平岩からは英会話を）習っている[114]。

９月24日，壬太郎は，『呉山一峰』当時の自戒＝〈知ラズヤ民権ノ拡張自由ノ伸暢ハ論者ノ品行ニ在リテ存スルヲ〉[115]を忘れない盟友・増田龍作（明治19年５月１日駿東郡楊原小学校仮主任の聘用に応じ，同年９月13日から三等訓導として勤務）から懇ろな手紙を受け取る。

“…曰ク，過般来ノ御不例復常益々御清勝欣喜々々。旧時ナラバ才子多病抔申シテ身体薄弱ノ者モ何ヤラ価値アリゲニ見ユレ共身心相関ノ理明ナル今日ニ在テハ忘身漢ヨ不摂生者ヨト嘲罵サ

ルヽ事トナリタレバ随分御自重専一，云々。又云ク，来論ノ如ク志士ノ心腸恒ニ鉄石ノ鋼ヲ有テハ何時カ彼岸ニ達スベキハ明ナル次第ナレ共君ガ所謂濁レル世ノ中ハ言行輒モスレバ一致セズ其外ヲ悲愴ニシ慷慨ニスルモノ往々有之。君ガ如キハ勿論此種ノ仮面志士ニハ非ルト雖モ何ガ故ニ是迄学資ヲ貯蓄セザリシヤ，何ガ故ニ判任官十等ノ地位ヲ保持シテ区々静陵ニ留マルヽヤ，此疑問ノ氷解スルニ非ザレバ生ハ俄ニ君ヲ以テ石心鉄腸ノ志士トハ許シ難シ，云々。…又曰ク，基督教研究ノ事ニ就テハ全ク同意也，云々。…”

十月三日　日曜日　暁天曇ル，九時頃ヨリ晴レ一時又曇ル。依例朝夕両回教会ニ至リ説教ヲ聴ク。山路弥吉氏郊遊ノ誘引アリ，依テ午餐ヲ喫シ洋衣ヲ装ヒ正午家ヲ発シ，浜村三乎氏（＝明治12年12月，静岡師範学校卒業）ト三人相伴ヒ清水山頂ニ登ル。西静陵ノ市街ヲ視，南蒼海ノ天ト一色ナルヲ眺メ而シテ東北黄田ノ穣々タルヲ見ル。…近時ノ快遊也

十月六日　晴　…午後七時依例教会ニ至ル。講題ハ基督教ノ進歩ト云。…

十月十五日　晴　…英文新約聖書一部ヲ購フ。

十月十七日　日曜日　神嘗祭　天気和晴秋風朗ナリ。午前八時登庁遥拝，其レヨリ直ニ教会ニ往キ説教ヲ聞キ終テ平岩牧師ニ道ヲ訪ヒ，十二時帰寓。基督教新聞三葉ヲ読ム。…又教会ニ至テ牧師ノ説教（最後ノ選別）ヲ聞ク。…

十月廿日　快晴　依例教会ニ至ル，太田虎吉氏（神ノ国ハ近矣）一題ヲ講ズ。

十月廿一日　大雨　…蛍雪ノ時機此時ニ過グルハアラザル也。自ラ誓フ，十時ヲ以テ寝ニ就キ六時ヲ以テ床ヲ出ヅ一日モ仮サヾル也。今夕馬太伝第五章ヲ原書ト対読シ合セテ註釈（バーンズ氏註釈米山定昌氏所蔵ニ係ル）[116]ニ藉リ其義ヲ講究ス。…

この日，10月21日，不平等条約改正運動の火勢を煽る「ノルマントン号事件」発生。愛助は，前島豊太郎（撹眠社社主＝『東海暁鐘新報』編集長〔明治20年１月から渋江保が主筆に〕）ら発企の遭難者遺族に対する義捐金募集に応じている[117]。

十月廿四日　朝起神道総論ヲ読ム。九時依例教会ニ至ル。牧師「神との親み（約第一書一ノ三）」一題ヲ講ゼラル，了テ愛餐ノ式ヲ行ハル。米国加奈陀ノ人ドクトル，オブ，アーツ，フランシス，エ，カツシデー（＝Francis Albert Cassidy）氏夫妻（＝９月23日来静）今般尋常中学校英語教師トシテ傭聘セラレ，私ニハ教会ノタメニ尽力セラルベキ由ヲ以テ今日列席セラレ，氏ニハ「如何ニシテ信徒トナリシヤ」ノ自身経歴ヲ談話セラル（平岩師之ヲ訳ス）。…予ハ此席ニ於テ平岩師ノ紹介ヲ以テ同氏夫婦ニ親昵シ握手ノ礼ヲ受クルヲ得タリ。…昨約アリ片瀬榛原郡書記今日午後ヲ以テ将サニ相訪ハント，聖書ノ講究会ニ欠席シテ之ヲ待ツ，終ニ至ラズ。…七時教会ニ至ル。本夕カツシデー氏ノ講義アルベシト云ヲ聞キ会衆夥ク無慮二百人ニ上

レリ（中学校生徒多キガ如シ）。初メニ宮代福音士「生命のパン」一題ヲ講ジ，次ニカツシデー氏以弗所書二ノ十三（使徒行伝十九ノ廿一以下参照）ニ就キ講演セラル（平岩師之ヲ訳ス）。了テ氏夫婦讃美歌ヲ朗誦セラル（英語）。氏ノ令閨ハ有名ナル音楽師トシテ頗ル巧妙ヲ得タリト云フ。時九時ナリ。天雨フル，雨ヲ侵シテ帰寓，十時就寝。…
十月廿八日　晴　暁起昨宵学ビ得タル聖書二章ヲ復誦シ且提多書第三章及ピレモンノ書ヲ英文ト対読ス。在庁ノ間，事務ノ閑ヲ偸ミ雪中梅上巻一冊ヲ読ム。…去ル八月以降大ニ悟ル所アリ。教会ニ至テ神ノ道ヲ尋ネ去テ聖経ヲ読ム。未ダ奥蘊ヲ窺ヒ尽ス能ハズト雖モ自ラ顧テ既往ヲ思ヘバ吾一身ハ是レ罪悪ノ淵叢ニシテ神ヲ汚スコト誠ニ多シ，静心熟慮恐懼ノ念禁ズル能ハザルモノアリ，悔恨亦何ゾ堪ヘン，断然志ヲ決シテバプテスマヲ受ケ神ノ教会ニ入リテ既往ノ罪悪ヲ潔メ来日ノ救ヲ得ン事ヲ欲スルヤ切ナリ。今日意ヲ松本君ニ致シテ平岩師ノ准許ヲ請ハシム。幸ニシテ許可アリ。午後七時松本氏ノ邸ニ至り米山，吉井，宮代三氏ニヨリ入門ノ試験ヲ受ク。将サニ来ル三十一日ヲ以テバプテスマヲ受ケントス。嗚呼予ガ身ハ昔日ノ身ニ非ザル也。願クハ主ノ助ニヨリテ身ヲ慎ミ行ヲ改メ信徒タルニ背カザラン事ヲ。

のちに壬太郎は伝道の動機を聞かれて，“曾て一日聖書を読み，哥林多（コリント）前書九章十六，七節「若し我れ福音を宣伝へずば実に禍なり，若し我れ好みて之を為さば賞を得ん，もし我れ好まざるも其責任は我に与れり」に至り神宛も我に語り給へるが如く感じ，終に身を伝道界に投ずるに至りし次第に御座候。”[118]と答えている。この聖句に深く触れたのは，受洗の前，８月以降のことであろう。

十月卅一日　日曜日　晴　朝起希伯来書第六章ヲ対読ス。九時教会ニ至リ牧師ノ説教ヲ聞ク，了テ洗礼ヲ受ク。願クハ之レヨリ神ノ家族トナリ身ヲ行ヒ過ヲ改メ来世ニ御救ヲ得ンコトヲ，アーメン。…洗礼式終リ晩餐ノ式ヲ行ハル。予モ亦今日ヨリ其式ニ与ルコトヲ得。（晩餐式は毎月第一日曜日ヲモツテ通例トス。牧師其妻（＝平岩銀子）病危篤ニシテ当地医家ノ治療及ブ所ニアラザルヲ以テ本日其妻及幼児三人ヲ携ヘ上京セントス。故ニ本日其式ヲ行ヒタルナリ。）午後二時牧師上京ノ途ニ就カントス。一時師ノ宅ニ至ル，信徒皆在リ，妻君ノ為ニ祈祷ヲナシ二時出立ス。妻君病重シト云フト雖モ気象常ニ異ナラズ容色甚シク憔悴セズ，駕ヲ命ジテ往ク。予ハ曲金村ノ東ニ至リ別ヲ告グ。微笑シテ云フ，厚意忘ルベカラズト，帰途根岸道氏ト君ノ安否ヲ話シ速ニ全癒ニ至ランコトヲ祈念セリ。此夜浴後疲労一時ニ発シ堪ヘ難キヲ以テ早ク寝ヌ。

古典からも儒教からも得られなかった生命を『天道溯原』（中村正直訓点），『真理一斑』（植村正久），『政教新論』（小崎弘道），『Natural Law in the Spritual World』（H. Drummond）といった基督教文学＝哲学的理論によって与えられ[119]，唯物的無神論・不可知論の迷酔から醒めて，〈人は

単に知識が博く深いだけでは人としての資格のないこと，この社会的物質生活以外に人は純真なる精神生活を追わねばならぬこと，金銭や物質だけにあこがれて霊魂の世界を知らずに終るのは動物の生活と異る所がないことなどを悟り，自分の本来の使命は知育を人に授けるだけでなくて，もっと偉大な仕事即ち万能の神の国の存在を凡ての人に伝えて，美しい平和な社会を実現させるにあるのではないか〉[120]との思いに至った壬太郎は，平岩牧師の手厚い導きもあり，“基督教全盛の時代”[121]の一時の感情に迫られることなく“生涯の運命の関”[122]を越えた。舌鋒を向けたこともしばしばであったが，壬太郎にとって，教会のために尽くして倦まない智の人，意志の人・平岩愃保は“最も敬重する先輩”の一人に違いなかった[123]。

後年，青年への根本の教訓として「汝の少き日に汝の造主を記えよ」（「伝道の書」12章１節）を引き，敬虔の念を喚起しようとする青山学院長の胸のうちには，この日の感動が込み上げていたことだろう[124]。

壬太郎は今ここに（静岡県人でもなく日本人でもなく）“天地の人”[125]となった。“基督教を信ずるに非ざれば自ら高尚なる理想に達し高潔なる品性を養ふこと能はず・日本国民を基督教化するに非ずんば到底日本国を率ひて真正文明の域に進ましむること能はず”[126]との確信を覚えた。

明くる11月１日，夫・愃保の活動を支え青年間の宣教につくした平岩銀子が，「苟くも悪をなさゞるを以て満足するなかれ，必ず進んで善事を為すべきなり。」という謙遜の美徳と果断な意志を秘めたことばを壬太郎らの心耳にのこして，二十六年十一ヵ月のいのちを終えた[127]。

十一月廿日　晴　朝起約翰伝第一章ヲ対読ス。退庁後馬太伝ヲ註シ夜ニ及ブ。今夕ヨリ佐藤重道氏英和会話篇少許ヅヽヲ研究ス，毎夜以テ例トナスベキニ規ス。

十一月廿一日　晴　日曜日　朝起約翰伝第二章ヲ対読ス。九時教会ニ往ク，太田氏「心貧シキ者ハ福也」一題ヲ講ズ。…七時教会ニ往ク，太田氏先ヅ「朽チザル頼リ（哥林多後書第四章十七，十八節）」ヲ講ジ，パストルカツシデー「基督ノ中ニ在ル福（哥林多後書八ノ九）」ヲ述ベラル（外山義文氏通訳ス）。

十一月廿八日　日曜日　朝　朝起約翰伝七章上半ヲ読ム。九時教会ニ至ル。宮代氏「耶蘇ノ十字架（哥林多前書一ノ十七ヨリ廿四）ヲ講述ス。…六時半妻弟等（弟ハ是迄毎会往カシム，妻ヲ伴シハ初メテナリ）ヲ伴ヒ教会ニ往ク。初ニ山路氏「羅馬ニ於ケル基督教」一題ヲ勧話セラル。次ニカツシデー氏外山氏ノ通弁ニヨリテ「神ノ愛」一題ヲ講読セラル。其大意ニ云，父母ノ子ヲ愛スル健全ナル者ヨリ却テ病身ノモノヲ愛シ其膝下ニ在ルモノヨリ逃走シタル不孝者ヲ愛スルモノナリ。今世間ニハ人間ノ先祖ハ猿也抔云ヘル進化論行ハルヽコトナルガ如此ハ実ニ神ノ側ヲ離レ逃亡シタル不孝者ノ如シ，然レ共神ハ一視同仁之ヲ愛セザルト云フコトナシ。実ニ吾々ハ小児ノ如キモノニシテ神ノ戒ヲ開ク時ハ何故吾ヲ束縛スルヤト疑フモノアレ共知識漸ク進歩スル時ハ神ノ愛ノ至テ大ナルヲ知ラン，尚小児ノ幼時父母ノ厳戒ヲウシト思ヒシモノガ

年長ジテ始テ其身幼児時ノ束縛ハ却テ幸福トナリシヲ悟ルニ至ルガ如シ，云々。

十二月三日　晴　寒気逐日甚シク本朝薄氷ヲ結ベリ。朝起約翰伝十一章ヲ対読ス。昨宵ヨリ今日ニ至リ日本開化小史巻四ヲ読了ス。…夜ニ入リ日耳曼史三十七章付録ヲ読了ス。此日清遠学務課長ヨリ君沢田方郡長ヨリ三島高等小学校ニ聘用致度旨申出タル趣ヲ以テ内諭ノ次第アリ。事情ヲ述テ之ヲ辞ス，…志望（＝上京）ノ時已ニ近ケレバ也。

十二月七日　晴　朝起約翰伝十三章ヲ読ム。田村幸充（＝当時，村松一らと麻布鳥居坂の自成学舎の教壇にも立ち，翌明治20年には舎主となる）ヨリ書ヲ贈ラル。曰ク，早速君ノ望ヲ満スベキノ途ナシ，云々。且少シク謀ル所アリ，依テ今夕蜂屋氏ヲ訪テ微意ヲ告ゲ其賛助ヲ得テ帰ル。直ニ一書ヲ認テ家君ニ謀ル。

十二月八日　晴　朝起約翰伝十四章ヲ読ム。…復往テ蜂屋氏ニ訪フ，氏ノ忠告ニヨリ暫時其企図ヲ中止シ時機ノ至ルヲ待ツニ決ス。書シテ家君ニ報ズ。嗚呼身ヲ微官ニ縛サル亦如何トモスル能ハズ，人ノ自由ナキ可嘆哉。十数日来知事退庁多ク夜ニ及ブ，本日亦寓ニ帰リシハ既ニ六時半也。嗚呼主殿寮松明ヲ進ムル事多シ，小史亦何ヲカ言ハンヤ。晩食後沐浴暖ヲ取ル。疲労一時ニ発シテ復机案ニ対スルニ慵シ，八時蓐ニ就ク。

十二月九日　晴　朝起約翰伝十五章ヲ読ム。夜ニ入リ日耳曼史第三十八章付録及三十九章（付録共）ヲ読ム。…羅馬字会脱会ノ旨ヲ該会事務所ニ通ズ。

十二月十一日　晴　約翰伝十七章上半ヲ対読ス。午後退庁後十二使徒略伝ヲ抄録ス。野村文部視学官本日ヲ以テ来県セリト聞ク。退庁ノ途次蜂屋師範学校長ヲ訪フテ高等師範学校入学ノ素志ヲ達セシメン事ヲ請フ，嚮ニ一旦其企図ヲ中止セシモ今此好機ニ際ス，時誠ニ失フベカラザル也，是再ビ蜂屋氏ヲ煩ハス所以也。帰寓机上ニ一書アリ，八木初太郎氏ノ寄贈ニ係ル。曰ク，君ノ高等師範学校入学ノ手続ヲナシタルヲ報ズルヤ厳君ハ非常ニ立腹シ居レリ云々ト。予来春上京ノ事ハ厳君ノ已ニ許シ玉フ所也，而シテ今此報ニ接ス，惑フテ措カザル也，然レ共今悠々此地ニ消光セン事ハ予ノ望ム所ニ非ズ，好機ノ乗ズベキアレバ之ニ乗ズル聊猶予スベキニ非ザル也，厳君ノ怒ノ如キハ他日之ヲ解クノ日アラン而已。

十二月十四日　曇　正午頃ヨリ降雨，夜ニ入リ益々甚シク且強風ヲ加ヘ又雷鳴アリ。本朝早起野村視学官ヲ大蔦屋ニ訪ヒ面謁ヲ得，学務課長及師範学校長ノ勧告ト紹介トアリタルヲ以テ也。即チ高等師範学校入学志願ノ意ヲ告グ，視学官予ガ履歴ノ大概ヲ問ハレ且告ルニ入学ノ心得ヲ以テセラル，然レ共召募生十二県ニ五名ニシテ応募者ハ三十名モアリト云，不肖ノ予其素志ヲ達セン事素ヨリ思モ寄ラザルコト也。唯我偃ノ親愛ナル天父ノ仁恵ニヨリ若シ聖意ニ叶フナラバ許シ玉ハン事切ニ懇祷スル所也。帰途平岩牧師ヲ訪フ。師昨日ヲ以テ恙ナク帰岡セラル，今ヨリ又教会ノ為ニ全力ヲ尽サルヽコトヲ得，誠ニ天父ノ賜ト云フベシ。…

十二月十六日　晴　朝起約翰伝十九章上半及日耳曼史少許ヲ読ム。在庁ノ間教育時論一冊ヲ読ム。午後四時家君来岡セラル。公務静波町ニ至ルノ序立チ寄ラレタル也。今夜家君ト話シテ十

時ニ至ル。小生ノ志望果シテ家君ノ拒ム所トナラズ，家君ハ急遽只事ヲ誤ラン事ヲ恐ルヽ也。…

十二月廿五日　晴　午後二時小児（俊子ト称ス）永眠ス。之ヨリ先キ昨夕十時頃ヨリ不快ノ模様アリ，初メ之ヲ知ラズ，十二時頃ニ至リ啼声漸ク低ク苦痛甚シキガ如シ且乳セズ眠ラズ初メテ病ノ至レルヲ知リ使ヲ馳セテ大川国手ノ来診ヲ請フ。午前一時半代診者来テ診ス，云ク，是レ嬰児テタニス（俗ニ之ヲホヽヅキ虫ト称ス）ナリ全快ノ程覚束ナシト，驚愕落胆，然レ共及ブ丈力ヲ尽シテ万一ノ快癒ヲ望ミタリ。如何セン病已ニ劇シク且薬餌ヲ嚥下スルノ力ナシ，徒ニ其苦痛ノ惨状ヲ傍視シテ死ヲ待ツノミ。午後二時国手来診尚施スベキアルヲ云薬餌ヲ改ム，未ダ之ヲ求ムルニ及バズシテ終ニ絶息ス。一家ノ愁傷只ナラズト雖モ明神此児ノ世ニ在ルヲ欲シ玉ハズシテ之ヲ天ニ取リ玉フ，吾等不充分ナル両親ノ手ヲ離レテ慈悲ナル天父ノ手ニ養育シ玉フヲ見レバ亦以テ慰ムベキナリ。…

聖誕節のこの日，12月25日，“一生中の一大事”が降りかかる。在世わずか七日，わが子を喪い打ちふさぐ壬太郎に扶助と同情を投げかけたのは耶蘇基督であった[128]。

十二月廿六日　日曜日　曇　午後ニ至リ晴ル。前九時松本氏来吊且本日大ニ周旋セラルヽノ約アリ，共ニ宝台院ニ至リ墓地ヲ周旋ス。寺僧並管理者之ヲ拒ム，松本氏論争十二時ニ至ル，議終ニ諧ハズ，予ハ家ニ帰リ送葬ノ準備ヲナス。松本，米山両氏復管理者ニ至リ周旋尽力セラル，彼遂ニ拒ム能ハズ。嗚呼墓地ハ是レ共葬ナリ而シテ彼レ仏徒猥ニ他教ヲ忌ミ他ノ妨害ヲナス，道ノ為ニスルニ非ザルナリ利ノ為ニスルナリ，仏門ノ光栄亦地ニ落チタリト謂フベシ，可嘆哉。初メ午後二時ヲ以テ出棺セントス而シテ前陳ノ如キ妨害ニ逢フテ五時ニ至ル。時恰モ五時廿分牧師平岩氏来リ葬儀ヲ営マル。棺ハ寝棺ニシテ黒布ヲ以テ之ヲ蔽ヒ上ニ水仙花ヲ置ク。初メ聖書哥林多前書十五章四十一節已下ヲ朗読セラレ，次ニ勧メ，次ニ祈祷ヲ以テ終ル。同卅分出棺，米山，金子，山路三氏交々棺ヲ荷ハル。宝台院寺内墓地久永勝成氏（君ハ伝道師ナリ，肺病ヲ以テ去廿一日眠る。）墓ノ左ニ葬ル，榜シテ高木俊女之墓ト云フ。六時式全ク了ル，各々帰途ニ就カル。此日会葬セラレタル者ハ信徒ニテ松本才三，米山定昌，吉見義次，金子義児，山路弥吉，服部某，藤川春龍，池田次郎吉ノ八氏，信徒外ニテ，市川啓三郎，増田守一，山田作蔵，小西亀吉ノ四氏ナリ。鵜殿長道，藤波甚助，加藤万吉夫妻ノ四君ハ途中ヨリ送葬セラル。…今回ノ事実ニ異郷ニ在テ恃ムニ親戚ナク身ヲ痛ムルコト多シ，而シテ已上諸氏ノ力ニヨリテ難ナク事ヲ了ル，特ニ松本，米山ノ両氏最モ深ク周旋尽力セラル，誠ニ以テ感謝スベシトナス。今夜増田守一氏来泊セラル。

十二月卅一日　晴　歳末匆々亦机案ニ対シテ書ヲ読ムニ慵シ，賀年ノ書状ヲ認テ一日ヲ消ス。…生ヤ尚信仰至テ薄ク動モスレバ悪魔ノ誘フ所トナラントス，今ヨリ尚心ヲ静メ思ヲ清メ神ノ

道ヲ求メテ主ノ栄ヲ顕ハスコトヲ勉メズンバアラザル也。且夫レ妻ヤ未ダ領洗ノ式ヲ受クルニ及バズ，之ヲシテ領洗セシメ且父母兄弟及親戚ヲシテ追々神ノ道ニ帰依セシメ神ノ清キ民トナラシメンコトハ明年ノ事業ニ譲ラザルヲ得ズ。…青年易老学難成トハ古人ノ名句ナリ。生ヤ今爰ニ廿三年ヲ終リ将ニ明旦ヲ以テ廿四年ノ春ヲ迎ヘントス。人生果シテ五十年ナラバ已ニ一生ノ半ヲ消了シタリトイフベシ。此間実ニ一事ノ為スコトナクシテ了ル，誠ニ遺憾禁ゼザル也。

岐路に惑いながらも壬太郎は，「死せる人」から「生ける人」となって，明治19年を送った。

注

(1) 「開書応答〔…第三問　貴下の誕生日を問ふ〕」高木壬太郎氏『基督教世界』M42. 9.30,「八木翁談片」高木壬太郎『八木翁紀念帖』T 2,「自から物せられた高木博士の伝記」聖山生（＝有富虎之助）『開拓者』T10. 3，中川根町町史研究会編『中川根の屋号』S62［河村計三氏］

(2) 池田次郎吉《高木壬太郎先生》S 7. 2. 8［青山学院資料センター］

(3) 「無意識論」『護教』M40. 5.11,《日記〔M24. 5，6頃〕》

(4) 《東海詩稿》M18［東京神学大学］

(5) 「基督教主義学校は何を以て其特色となすべきか」高木壬太郎『青山学報』T 9.10,「自から物せられし高木博士の伝記(三)」聖山生纂『開拓者』T10. 7

(6) 「八木翁追懐録(四)」田畑蹇堂（前掲『八木翁紀念帖』）

(7) 《筆者宛高木智夫氏書簡〔S63. 2.11〕》

(8) 「八木翁追懐録(五)」高木壬太郎（前掲『八木翁紀念帖』）

(9) 「福沢諭吉と現時の基督教会」高木壬太郎『護教』M40. 4.27

(10) 「実業者間の伝道」M36. 5.23,「伝道上の勝利を謀るべし」M37. 3.19.「戦闘的態度を取るべし」M38. 1. 2,「基督教主義学校論(上)」M38. 7.22,「我国民の精神的素養」M39. 6. 2　以上『護教』の壬太郎文,「智能を啓発し徳器を成就す」高木壬太郎『青山学報』T 9.12，前掲「自から物せられし高木博士の伝記(三)」

(11) 《長尾学校履歴》［河村計三氏］,《学校沿革誌》,《開校百年記念・中央小の歩み》S49［中川根町立中央小学校］,「静岡県公立小学校表」『文部省年報』M 8

(12) 河村八郎次《無題（壬太郎追想）》T11［東京神学大学］

(13) 八木又左衛門《長尾学校開校式・祝詞》M 9.10.15［中川根町立中央小学校］

(14) 前掲《学校沿革史》《長尾学校履歴》,「八木翁追懐録(一)」近藤鈴太郎（前掲『八木翁紀念帖』）,「上長尾小学校の歴史」小澤節子『中川根ふる里通信』H 1. 1

(15) 近藤鈴太郎《無題（壬太郎追想）》［東京神学大学］

(16) 「文部省廃止説に就いて」『護教』M39. 2. 7,「天を相手とする教育」『福音新報』T 3. 7.23,「外国宣教師と日本の教化」『太陽』T 9.10　以上，壬太郎文

(17) 「無名の弟子」M37. 7. 9,「恩師の死を追悼して当今の師道に及ぶ」M39. 2.17　ともに『護教』の壬太郎文,「最近余の頭脳を往来する感想」高木壬太郎『実業之世界』T10. 2,《日記〔M25. 4. 28〕》

(18) 「父・生活史」高木一三《高木壬太郎紀念録作成ノート》T11［東京神学大学］,「人生の重荷」『護教』M36. 9.12,「教権の根本は信念」『国民教育』T 2. 9　共に壬太郎文

(19) 「灯火独語」倭丈夫『呉山一峰』M14. 2［河村計三氏］

(20) 《日記〔M17.10.15〕》,《神学博士高木壬太郎氏講演・下長尾尋常小学同窓会》M45. 1. 7（高木吾一速記）［小沢俊夫氏，松下麟一氏，八木伊三郎氏］

(21) 「バチエラー，オブ，ヂヴイニチー・高木壬太郎君」日本力行会出版部編『現今日本名家列伝』M36
(22) 瑞軒子《退静岡師範黌》M14．5［東京神学大学］
(23) 「故マクドナルド博士の事」高木壬太郎『護教』M38．2．11
(24) 前掲「自から物せられた高木博士の伝記」T10．3，「高木壬太郎」警醒社編『信仰三十年基督者列伝』T10，「〔静岡新聞〕輓近世上ノ論者ガ動トモスレバ耶蘇宗教ノ蔓延スルヲ杞憂シ…」『静岡新聞』M11．3．18
(25) 「〔叢談〕○旧城内在留（ドクトル・マクドナルド）氏はさすが法教師だけありて善行人なり…」『重新静岡新聞』M9．6．7
(26) 「加那太メソヂスト教会総会に於ける日本伝道。日本伝道問題。日本メソヂスト教会員諸君に報ず。」高木壬太郎『護教』M31.10.29，前掲「故マクドナルド博士の事」，「〔教報〕○故マクドナルド博士追悼会」『護教』M38．3．4
(27) 「富士のみゆき」太田資行『静岡新聞』M11.11．6，『北陸東海御巡幸誌』M11．7．30
(28) 「人格に文材を盛れ」高木壬太郎『日本及日本人』T5．9
(29) 「故青山学院長神学博士高木壬太郎君」池田次郎吉《明治初期の静岡・第二編》S16［静岡県立中央図書館］
(30) 「養生論」山路弥吉『独立評論』T3．7
(31) 根岸貫《無題（壬太郎追想）》T11［東京神学大学］
(32) 前掲．根岸貫《無題（壬太郎追想）》（三輪小十郎編『平賀敏君伝』S6）
(33) 「星」高木壬太郎『護教』M35．8．9，高木壬太郎《飄蓬録》M32．8．5［東京神学大学］，前掲．根岸貫《無題（壬太郎追想）》，前掲「福沢諭吉と現時の基督教会」
(34) 増田守一《追憶》T11［東京神学大学］
(35) 「新年ノ感」香山逸民『呉山一峰』M14．1［河村計三氏］，「自から物せられた高木博士の伝記」聖山生纂『開拓者』T10．4
(36) 前掲．根岸貫《無題（壬太郎追想）》（池田次郎吉《坎堂先生》T11［東京神学大学］）
(37) 「一夢半百歳」山路愛山『国民新聞』T6．1．1
(38) 前掲《飄蓬録》
(39) 「紊権・第一編」「同・第二編」呉山小史『函右日報』M13.12.12，12.14
(40) 「告天下之学生文・第二」坎堂主人『呉山一峰』M13.12［河村計三氏］
(41) 色川大吉『明治人・その青春群像』S53
(42) 前掲．根岸貫《無題（壬太郎追想）》
(43) 「文部省廃止説に就て」『護教』M36．8．29，「我国将来の基督教」『開拓者』M41.12，「如何にして憲法発布三十年を記念すべきか」『中外新論』T8．2　以上，壬太郎文，「諸友訓誨録（承前）」愛山生『信濃毎日新聞』M32．6．14（「元気論」高木瑞『静岡新聞』M14．4．22）
(44) 前掲《退静岡師範黌》，「故高木壬太郎博士の思ひ出」池田次郎吉『教界時報』T10．2．25，「○静岡県下学事一斑」『教育新誌』M14．8．3
(45) 前掲《退静岡師範黌》
(46) 前掲《退静岡師範黌》
(47) 「故高木壬太郎氏略歴」波多野伝四郎『青山学報』T10．5，前掲《飄蓬録》
(48) 《学校沿革誌》［御殿場市立高根小学校］
(49) 「田舎雑感」高木壬太郎『護教』M37.10．1，「青年中心の時代去る」山路愛山『商業界』M41．1，「非老成論」山路愛山『白金学報』M42．7，「青年論」山路愛山『新文林』M42.10，「愛山先生（上）」静中堂主人『読書之友』T2．10，前掲「自から物せられた高木博士の伝記」T10．4，「わが父を語る（一）生いたち」高木二郎『広報中川根』S37．5［中川根町教育委員会］
(50) 滝口源太郎《無題（壬太郎追想）》T11［東京神学大学］
(51) 御殿場市立高根小学校創立百周年記念事業委員会編『自戒』S50
(52) 「自己教育」『聖書之友雑誌』M28.11

(53) 《日記〔T5.7.29, 8.20, T6.5.2, 6.7, 6.8〕》
(54) 「如何なる書籍に由て基督教の思想に接触せしや(一)」『護教』M42.10.16（「運命論」高木壬太郎『道話』T5.6）
(55) 前掲. 滝口源太郎《無題（壬太郎追想)》,《日記〔M23.12.5〕》
(56) 前掲「八木翁追懐録(五)」, 前掲「福沢諭吉と現時の基督教会」
(57) 「岡眼八目論（前号ノ続キ)」坎堂樵夫『静岡新聞』M14.9.25, 前掲《飄蓬録》
(58) 「黙れ訓導」静丘山人『沼津新聞』M15.2.16
(59) 前掲《学校沿革史》, 静岡県立教育研修所編『静岡県教育史・資料編(上巻)』S48,「〔雑報〕○連合教育会」『東海暁鐘新報』M14.12.13
(60) 筆者不明《公時山の霜葉》M15.10［東京神学大学］
(61) 前掲「故高木壬太郎博士の思ひ出」
(62) 前掲《飄蓬録》(「小学生徒貯金ノ必要ヲ論ジ併テ其実験ヲ述ブ」根岸貫『教育時論』M28.8)
(63) 「○静岡師範学校卒業生同窓会広告」『函右日報』M15.12.20,「〔雑報〕○師範校卒業生同窓会(つゞき)」『静岡新聞』M16.1.9
(64) 「告天下民権党」横山幾弥『蛍雪余談』M14.1
(65) 「小言(四)人間果して住むに堪へざる乎」山路生『護教』M24.12.12,「曾田氏東海暁鐘新報ヲ去ル」『静岡新聞』M16.1.28（「曾田愛三郎氏の遺書」『聖書之友雑誌』M25.1.16)
(66) 前掲. 滝口源太郎《無題（壬太郎追想)》(「現代金権史」山路愛山『商工世界太平洋』M40.6.15)
(67) 前掲《学校沿革史》, 前掲《飄蓬録》,《高木壬太郎履歴書》［東京都立公文書館］, 前掲「父・生活史」
(68) 「学生ノ目的ヲ論ス」加藤瑞堂『静岡大務新聞』M17.4.25
(69) 前掲《飄蓬録》,《日記〔M19.7.16〕》
(70) 前掲《飄蓬録》, 前掲「自から物せられた高木博士の伝記」T10.4, 前掲. 河村八郎次《無題（壬太郎追想)》, 山梨易司編『静岡県職員録』M17.8
(71) 《日記〔M17.10.20, 10.29〕》, 前掲《飄蓬録》
(72) 《日記〔M19.4.10〕》
(73) 「生の宗教」高木壬太郎『開拓者』T4.11
(74) 《日記〔M18.8.2〕》,《大石家の先祖を尋ねて・大石家の系図概略》［水井雅子氏］,《筆者宛大石壮太郎氏書簡〔S63.5.31付〕》
(75) 《日記〔M18.8.4, M24.2.7〕》, 前掲《高木壬太郎履歴書》,「相良紀行」秋紅生『護教』M36.11.14, 前掲. 河村八郎次《無題（壬太郎追想)》,「〔広告〕榛原郡辱知諸彦…」高木壬太郎『東海暁鐘新報』M18.8.18
(76) 《日記〔M18.8.1〕》,「〔雑録〕○高木壬太郎氏」『東海暁鐘新報』M18.8.15, 前掲. 増田守一《追憶》
(77) 「霊の果」高木壬太郎『護教』M34.4.6,「〔雑報〕耶蘇教信徒の勉強」『東海暁鐘新報』M18.8.27
(78) 前掲「自から物せられた高木博士の伝記」T10.3
(79) 「人生の一大時期」『聖書之友雑誌』M28.9,「向上の機」『護教』M38.6.3
(80) 「五十年を振返りて」平岩愃保『日本伝道めぐみのあと』(卜部幾太郎編) S5,「教育ある信徒と教会と(五)」高木壬太郎『護教』M38.4.1
(81) 「平岩前監督のありし日を懐ふ」太田嘯風生『なみだ』(山口信義編) S8,「教会は家庭也」高木壬太郎『護教』M35.7.19,「高木前院長記念祭」『青山学報』S7.2.27
(82) 前掲. 滝口源太郎《無題（壬太郎追想)》
(83) 「静岡師範の二秀才」伊東圭一郎『東海三州の人物』T3, 前掲「平岩前監督のあり日を懐ふ」, 前掲《追憶》
(84) 「伊志田平三郎君を思ふ」池田次郎吉『教界時報』T9.1.15

(85) 「〔雑報〕○基督教演説会」『静岡大務新聞』M18.10.8など,《橋本睦之日記〔M18.10.5〕》[塩入隆氏],「来るべき総選挙と基督教徒」高木壬太郎『護教』M35.3.29

(86) 「徳川氏＝対＝羅馬教」愛山生『野声反響』M24.3 (「今後の事業」高木壬太郎『護教』M34.7.13)

(87) 「田舎牧師」山路弥吉『護教』M26.2.4,「耶蘇教に就いて思ふ事ども」山路愛山『火柱』M41.11

(88) 前掲『信仰三十年基督者列伝』,《日記〔M19.4.10〕》,前掲. 河村八郎次《無題(壬太郎追想)》,前掲《筆者宛高木智夫氏書簡〔S63.2.11付〕》,《筆者宛大石壮太郎氏書簡〔S63.3.18付〕》

(89) 《日記〔M19.2.1〕》,「○転居広告」『静岡大務新聞』M19.2.7, 2.9『静岡県隆美協会雑誌』M19.3

(90) 「命耶罪耶(十四)所謂静岡事件(二)」愛山生『国民新聞』M28.3.27

(91) 《私立静岡県教育会規則》[静岡市教育委員会],「〔教育之部・雑録〕○私立静岡教育会」『静岡県隆美協会雑誌』M18.12,《日記〔M19.2.7〕》

(92) 「〔雑報〕○静岡青年会」『東海暁鐘新報』M18.12.16, 12.25, M19.1.27, 2.24, 3.11, 4.14『静岡大務新聞』M18.12.24, 12.25, M19.1.12, 3.12, 9.29

(93) 「在陵書生懇親会主唱者諸君ニ望ム」多清『東海暁鐘新報』M19.1.30,「〔広告〕在陵書生懇親会」『静岡大務新聞』M19.1.27,《日記〔M19.1.28〕》

(94) 《日記〔M19.2.24〕》,前掲《飄蓬録》,「現代青年論」山路愛山『新紀元』T2.7

(95) 「命耶罪耶(二十一)所謂静岡事件(九)」愛山生『国民新聞』M28.4.10

(96) 《日記〔M19.2.12～3.11〕》,「種痘論」不為已齋主人,「通俗衛生会の必要・夫人束髪」東海生,「明治十八年衛生記事」東海生,「同(承前)」東海迂狂『静岡県隆美協会雑誌』M18.11.20, 12.20, M19.1.10, 2.20

(97) 《日記〔M19.3.26〕》

(98) 《日記〔M19.5.18〕》

(99) 前掲《追憶》

(100) 《日記〔M19.5.18〕》

(101) 「命耶罪耶(十五)所謂静岡事件(三)」愛山生『国民新聞』M28.3.28

(102) 「〔Along the Line〕JAPAN. A Report of the Evangelization of Shidzuoka-A Prefecture in General. (Y. HIRAIWA. SHIDZUOKA, April 1st, 1886.)」『THE MISSIONARY OUTLOOK』1886.9(『静岡英和女学院史料・下』H1),「〔雑報〕○道路耶蘇演説」『静岡大務新聞』M19.7.25,「〔Along the Line〕JAPAN. Extract from a report of the REV. M. KOBAYASHI to REV. DR. EBY, dated SHIDZUOKA, 26th, July, 1887.」『THE MISSIONARY OUTLOOK』1887.11,「現代思想史に於ける基督教の位置(四)」山路弥吉『独立評論』M38.5

(103) 《日記〔M19.8.16, 12.31〕》

(104) 「村松一先生の行実」山路弥吉『護教』T4.6.18

(105) 「教導石建設広告」『静岡大務新聞』M19.6.17

(106) 「主耶蘇基督」『護教』M35.12.20,「秩序ある生活」『護教』M38.1.14,「死者に死者を葬らせよ」『護教』M38.3.18,「宗教の思想と形式」『新人』M41.6,「余裕論」『六合雑誌』M41.6 以上,壬太郎文

(107) 「人生の一大時期(上)」『護教』M34.11.9

(108) 「近代批評の基督教々義に及ぼせる影響」『新人』T3.7,「世界に於ける基督教の地位」『新人』M45.3 (「几上漫話」高木壬太郎『護教』M35.6.21,「予と基督教」山路愛山『雄弁』T6.4)

(109) 倉長巍『平岩愃保伝』S13,前掲「自から物せられた高木博士の伝記」T10.4,「信仰の偉大」高木壬太郎『護教』M45.7.12

(110) 「新聞今昔譚(其三)」渋江保氏談話『独立評論』T3.4

(111) 《私立静岡英学校々則変更ニ付伺書》[静岡市教育委員会]

(112) 「山路愛山」比屋根安定『教界三十五人像』S34

(113) 前掲「人格に文材を盛れ」
(114) 「〔最近要報〕○高等英華学校定期試験」『静岡大務新聞』M20. 2 .27
(115) 「論者ノ品行・第三」香山逸民『呉山一峰』M14. 2 [河村計三氏]
(116) 三浦徹訳『バーンズ氏新訳全書注釈・馬太伝』M18～20（1～5号），前掲「如何なる書籍に由て基督教の思想に接触せしや(一)」(「諸名家愛誦の聖句及び讃美歌」高木壬太郎『聖書講義録』M38. 7）
(117) 「ノルマントン号事件義捐者氏名・静岡県下有志者義捐（静岡大務新聞社，東海暁鐘新聞社取次)」『郵便報知新聞』M20. 1 . 5， 1 . 7
(118) 「予が伝道の動機」『基督教世界』T 4 . 7 . 1
(119) 「我国に於ける将来の基督教」高木壬太郎『基督教世界』M41.10.29，前掲「如何なる書籍に由て基督教の思想に接触せしや(一)」，「信仰実験談」高木壬太郎『基督教世界』M39. 4 .12，以下『護教』の壬太郎文　「無益の追悔」M26. 8 .12，「机上雑纂」M34. 7 .13，前掲「霊の果」，「霊魂の不滅(下)」M34.12. 7，前掲「几上漫話」，「〔基督教的品性説教・第六回〕愛」M36. 1 .24，「青森県の飢饉」M36. 3 .21
(120) 「わが父を語る(二)心境の変化」高木二郎『広報中川根』S 37. 6
(121) 「基督教徒の品性」『聖書之友雑誌』M28.10
(122) 「人生の一大時期(下)」『護教』M34.11.16
(123) 前掲『東海三州の人物』，結城礼一郎『旧幕新撰組の結城無二三』S51，「新監督平岩愃保氏」『福音新報』M45. 4 .18，松井豊吉編『日本メソヂスト静岡教会六拾年史』S 9，「新任監督を迎ふ」高木壬太郎『護教』M45. 4 .12
(124) 「無題」高木壬太郎君『学生と宗教』（文明堂編）M39，「青年に与へたる金科玉条」高木壬太郎『雄弁』T 3 . 6
(125) 前掲《飄蓬録》
(126) 「所感を述て新年を迎ふ」『聖書之友雑誌』M29. 1
(127) 「〔雑報〕○平岩銀子の葬儀」『静岡大務新聞』M19.11. 6
(128) 「基督の復活」高木壬太郎『護教』M35. 4 . 5